室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華(とどほっけ)における言語と風習：失われゆく伝統(２)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): Todohokke dialect, devoicing, volcalization, standardization, folklore 作成者: 島田, 武, 橋本, 邦彦, 寺田, 昭夫, 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/89

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華(とどほっけ)における言語と風習 : 失われゆく伝統(２)

その他（別言語等）のタイトル	Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(2)
著者	島田　武, 橋本　邦彦, 寺田　昭夫, 塩谷　亨
雑誌名	室蘭工業大学紀要
巻	53
ページ	87-97
発行年	2003-11
URL	http://hdl.handle.net/10258/89

室工大紀要第 53 号（2003）87~97

椴法華（とどほっけ）における言語と風習－失われゆく伝統(2)

島田　武*1，橋本邦彦*1，寺田昭夫*1，塩谷　亨*1

Endangered Dialect and Tradition in Todohokke(2)

Takeshi SHIMADA, Kunihiko HASHIMOTO,
Akio TERADA and Toru SHIONOYA

（原稿受付日　平成 15 年 5 月 6 日　　論文受理日　平成 15 年 8 月 29 日）

Abstract

This article is the second report of urgent survey on the Todohokke Dialect, which is considered one of the endangered dialects in Japan. The present study describes phonetic properties and gives a presentation of vocabulary and folkloristic customs in Todohokke to preserve its linguistic features and other precious heritage and tradition.

keywords: Todohokke dialect, devoicing, vocalization, standardization, folklore

1　序論

平成 12 年 7 月に道南渡島東岸部方言調査の研究チームを発足させて以来、亀田郡椴法華村での言語調査を継続して行ってきた。著しい共通語化の波により伝統的な方言の消滅への危機が更に高まっている中、この種の調査研究の緊急性と重要性はより一層増しているものと考えられる。従って、現地での録音・記録の収集作業は今後も持続的かつ緊急に進めていかなければいけない作業である。今記録しなければ失われてしまうかもしれない貴重な方言の記録及び分析作業が言語学上極めて重要であるのはもちろんであるが、近年、言語調査を行う言語学者に対して、言語調査の成果は十分に地元へ還元できるように努力せよとの要求が内外の学会等でも高まっている。それに答えるためにも、本稿は方言調査から得られた言語学的な成果を示すことばかりでなく、地方の貴重な遺産である方言を地元の人々がアクセスできるような形で残すという目的も考慮している。カタカナ表記の資料、及びその標準口語訳を用意したものはそのような用途にも供するものである。

*1 共通講座

2. 談話テキストと覚書

以下で、第1回調査で記録された談話テキストを掲載する。これは、約70分の CD 録音のうち前回発表しきれなかった後半部分である。(1) 橋本が最初に音声資料

を基にカナ表記し標準語訳したものを、寺田(七飯町出身)、丹治(松前町出身)両名がチェックし修正した。カナ表記はあくまで北海道南部出身者の聴覚印象によったので、厳密な音声情報に関しては、付録(Appendix)に挙げた IPA 音声記号による表示資料を参照していただきたい。

2. 1. 椴法華村第1回方言調査談話記録(後半):カタカナ表記と標準口語訳[(2)]

01 タドエバ ホレ ムガシ アノ コゴサネ アノ エーガ
たとえば ほれ 昔 あの ここにね あの 映画
クルンデスヨ エーガネ
がくるんですよ 映画がね

02 ソイエバ ハダモヂッテネ シトリガフタリシテ
そういえば 旗持ちっていってね 一人か二人して
ハダモヅワゲナンサ
旗を持つわけなんですよ

03 ノ ソイデ ハダモッテ ムラジュ コ アルグンダ
ね それで 旗を持って 村中を こう 歩くんです
ヨネ ムラジューアルグワゲダ
よね 村中を歩くわけです

04 デ ソイドギ ホレ ケン ニメーダニメー サン
で そういうときに ほら 券を 二枚なら二枚 三枚
メーダサンメー ケルワゲナノセ
なら三枚 くれるわけなんです

05 ﾀﾞｹﾄﾞ サンマイモラッタラ サンニンヨリハイレ
だけども (券を)三枚もらったら 三人以上は入れ
ネーベシ
ないでしょう

06 ソイダカラ ホレ ナガマガイテ ホレ ノ ションベン
それだから ほら 仲間がいて ほら ね 小便をしに
シニデテイグインタフリコイデー ホレ ノ ウラドアゲ
行くようなふりをして ほら ね 裏の戸を
デハ ハイッテ マダミデデモネ ベヅ
開けて 入って また(映画を)見ていてもね 別に
ニマダ アノー オゴリモシネーンダヨ ノ
また あの 怒ることもしないんだよ ね

07 タダ ソーユーノ ナンチュンガ ノドガチュ
ただ そういうのを どう言ったらいいのか のどかっ
ンダガネ ソーユー ヤッパリ フーシューワ
て言うんですかね そういう やっぱり 風習がありま
ｱｯﾀﾈ
したね

08 コドモノゴロノアソビッテユエバネ アノー ヤッパリ
子供の頃の遊びっていうとね あのう やっぱり
ヤマサイッテ ハダトリダノ
山へ行って 旗取りですね

09 ハダトリ ハダッテ シノマルノハダトガ アノー アイ
旗取り 旗って 日の丸の旗だとか あのう あ
ダ
れだ

10 ウンダ ソンデ コッチャコレネーヨーニシテ
そうだ それで こっちの方へは来れないようにして
マー タドエバ オレダヂノバーイデアレバ トサンダ
まあ たとえば 私たちの場合であれば とうさん
ヂノバーイデアレバ ノ オナジサギデモ ココモト
たちの場合であれば ね 同じ岬でも ここは元
ムラッテドゴダシ ココカラニキロクライイッタドゴニ
村っていう所ですし ここから二キロメートル行った所
トミーラッテドゴアルンスヨ
に 富浦っていう所があるんですよ

11 デ トミーラアダリモ フタテニ ヤッパリワガレデアル
で 富浦あたりでも 二手に やっぱり分かれてあ
ワゲダベシ マ シトブラクデアッテモネ デ
るわけなんでしょう ま 一部落であってもね で
コッチノダンタイド コッチノダンタイド ワガレデ
こっちの団体と こっちの団体と 分かれて
ハダトリスルワケダベシ
旗取りをするわけなんですよ

12 ウン マズィネ ソイデ マダ チョンドイイノハラアル
うん まずね それで また ちょうどいい野原があ
ンダ ミンナシテ ホレ カマモッテッテ シラツヲ
るんだ みんなで ほら 鎌を持っていって さら地
ツクッテサ シラ シラ ノ ワガルデショ
をつくってさ さら さら ね わかるでしょ

13 マー ソイデ チョンドイーイイスアルンダベスィ
まあ それで ちょうどいい石があるんですよ
ソイデ チャントハダタデデオグワケセ
それで ちゃんと旗を立てておくわけです

14 デ コッツィノダンタイワ コッツィノダンタイデモッテ
で こっちの団体は こっちの団体でもって
モーソーユードゴデ ウンドーカイモヤルインタ
もうそういう所で 運動会もやってもいいよう
ハー
なんです(広さのこと)

15 ミンナアズマッテ アレ コサウンダ グランド
みんな集まって あれ こしらえるんだ グランド
ツクルワケヤベシ
つくるわけなんですよ

16 ソイデ ホレ コッツィトソッツィノホード ノ ツカイシト
それで ほら こっちとそっちのほうと の 使いの
リ イタリキタリシテ ノ デ コノー ホレ
者がひとり 行ったり来たりして の で このう ほら

ヨグケンカコグンダ　ウンダヨー
よく喧嘩をするんだ　そうなんですよ

17 ソゴトーセバ　ソッチノホーノハダトラレルベシ　マ
そこを通せば　そちらの方の旗を取られるでしょう　ま
ダ　ソッチコッチトーセバ　ソッチノハダトラレルベシ
た　そちらこちらを通せば　そちらの旗を取られるで
ノ
しょう　の

18 ソイデ　ホレ　ヤマニイッデ　ハダトリシテ　デ　アソ
それで　ほら　山に行って　旗取りをして　で　遊ん
ンデ　テンデニミヲトッテノ　ソイデ　マー
で　好き勝手に木の実を取ってね　それで　まあ
イエサカエル　マー　ソーユーアソビダネ
家に帰る　まあ　そういう遊びだね

19 イヤベツニネーノ
いや別にないね

20 マー　オソラグ　オラダヂワ　マー　ソンナモンダネ
まあ　おそらく　私たちは　まあ　そんなもんだね

21 マー　アメフバ　ジンジャサハイテノ　マノリヤル
まあ　雨が降れば　神社に入ってね　馬乗りを
クライナモンデ　パッチヤルクレーナモンデ
やるくらいなもんで　めんこをやるくらいなもんで

22 ホトンッド　イマンドコデワ
ほとんど　いまのところでは

23 マズ　アソビーッテバ　パッツィカ　オミヤサイッテー
まず　遊びといえば　めんこか　お宮に行って
ウマノリダノー
馬乗りだねえ

24 ナンモ　オナゴサー　ノー　カーサンダヂモ
なんも　女の人たちは　ねえ　かあさんたちも
ガクセイデモ　ケッコーヤッタッテ　キイデダネー
学生でも　結構やったって　聞いていましたねえ

25 タイソーバデ　ヤスミジカンナレバネ
体操場で　休み時間になればね

26 ツナガッテッテ　ウスィロカラ　コッコハネデイグワゲ
つながっていて　後ろから　こんな風にはねていくダベセ
わけです

27 アスビーッテナ　ウマノルクレナモンダナ
遊びっていえば　馬乗りするくらいなもんですね
ウマノリガ　パッツィガ
馬乗りか　めんこか

28 ソーユーノ　ネーナー　キイダゴトネーナー
そういうのは　ないですねえ　聞いたことがないですねえ

29 ウヂノムゴガネー　イワテケンノトーノガラキテルン
うちのむこがねえ　岩手県の遠野からきてるんでダワ
すよ

30 マズィネ　ソイデ　オレモ　ホレ　イマユータ　コー
まずね　それで　私も　ほら　いま言った　こうい
ユーオハナシ　スキナモンダカラ　ネー　アノー
うようなお話が　好きなものですから　ねえ　あのう
ヤナギダクニオノトーノモノガダリヨンデ　イッカイ
柳田国男の『遠野物語』を読んで　一回
イクセーイクセートオモッタダケヤ　ネー　オガノム
行こう行こうと思っていたら　ねえ　自分の娘
スメドトーノノオムゴサンド　イッショニナッチマッタン
と遠野のむこさんとが　いっしょになったんだもドモノ　マー　ソレガイッテサ　ズィーブン　イマ
の　まあ　それがいいってさ　ずいぶん　いまノ　カッパモノガダリダトカ　イロイロナソーユーモノ
ね　河童物語とか　いろいろなそのような物ガダリアルケド　トドホッケニワ　ソーユーモノ
語がありますけれど　椴法華村には　そのような物ガダリワ　ネーナー
語は　ないですねえ

31 ザシキワラシノゴト　ノー　ザシキワラシニナッチマウ
座敷童子のこと　ねえ　座敷童子になってしまうケド　キイダゴトネーナー
けれど　聞いたことはないですねえ

32 ウン　ソレワ　アルアル
うん　それは　ありますあります

33 チョット　カーサンドハナシシテフトンズィデ　コイデ
ちょっと　かあさんと話をするのと同じで　これでシントアダイデクレバナ　アノー　アイダ　アノー
ヒントを与えてくれればな　あのう　あれだ　あのうイマユートーリ　アノー　アガシャクノ
いま言う通り　あのう　(船の)水をかき出すひアガシャクフタツモッテイグンダトセー
しゃくをね　水をかき出すひしゃくを二つ持っていくんだそうです

34 アガカグ　アノシャク　アノカグヤツネ
水をかき出す　あのひしゃく　あのかき出すやつね

35 ソイデ　コンド　アノ　アイダ　ホレ　ヤマギシノ
それで　今度　あの　あれだ　ほら　山岸の
ジーカラ　キイダンダイナー
爺さまから　聞いたんだよなあ

36 オイダー　ホレ　アノ　サワラッテドコデ　フナダイク
俺たち　ほら　あの　砂原っていう所で　船大工の

ミナライニイッテタンダワ
見習いに行っていたんですよ
37 ホイデ ソコデ ホレ ウヂデフネツクッタワゲナン
それで そこで ほら うちで船を作ったわけなん
デー
で
38 デモ トドホッケマデ カレコレゴロッキロアルモンダ
でも 椴法華まで かれこれ五、六キロあるもんだ
カラネ オナジアカシャクデモネ アノー フタツモデ
からね 同じひしゃくでもね あのう 二つ持て
バイインダテ シドツワ ホレ ソコヌイデ
ばいいんだそうです 一つは ほら 底を抜いて
シドツワ ソノー アガシャクモッテ ウン
もう一つは その ひしゃくを持って うん
39 ソイデ ホレ アガシャクカセッチュータラネ
それで ほら ひしゃくを貸せって言われたらね
ソゴヌイダヤヅカシテヤレバ コンダミズハイネンダ
底を抜いた方を貸してやれば 今度は水が入ってこ
テ オレダチサワラニイテ ハレ コサエ
ないんだって 私たちは砂原にいて ほれ (ひしゃ
デ コサエダオボエアルモンシタッテ
くを)こしらえて こしらえたおぼえがあるから
40 アガカグノ フツーアガカグテーバ
水をかき出すの 普通水をかき出すっていえば
アノアイダ ココーナッテツツイデー ココカグンダ
あのあれだ こうなって突っついて ここでかき出
ケド ネ シテ ケツノホー イダウ
すんだけれど ね そして (柄の)端の方で 板を
ダネンデヤッタモンダー
打たないでやったもんだ
41 ソーユーアレワアルケドー マー オラダヂ チョクセ
そういうあれはあるけれど まあ 私たちは 直接ね
ツネー モー オラダヂノダイワ ショーワジュー
え もう 私たちの世代は 昭和十
モノオボエツイダノワ ジューネンカラネ ジューニサ
物覚えがついたのは 十年からね 十二、三年
ンネンナッテイグカラ タイシターマダー ネ
になっていくから [話題転換] ね
ドーリョクセンガネ ドンドン ホレ コーデギデルカラ
動力船がね どんどん ほら こうできているから
マー イマンドゴデワ ソーユーノ キイダゴト
まあ いまのところでは そういうのは 聞いたことは
ネーナ
ありませんね
42 オレ コネンダモナ ウヂノカーサンニイッタモン
わたしは この間も うちのかあさんにも言ったん
ダケドモ ナンガムカシンノオッカネーハナシダトカ
だけど 何か昔のこわい話だとか
ネ ナケバヤマカラモーコクルトガテ ソ
ね 泣けば山からモーコが来るとかいった そう
ソイサ ツイテユグノネーカテ カンズィ ハナシ
それさ 似ている話がないかって いろいろ 話をし
シテダ
ていたんですよ
43 ワガル ワガル オーオー
わかる わかる おうおう
44 イマチョット コーキガレデモナー
いまちょっと こんな風に聞かれてもなあ
45 マー アソビダバネ アノ イロイロアッタネ
まあ 遊びならね あの 色々ありましたね
46 マジ オレモ マッ コゴサカイダケドネ
まずわたしも まっ ここに書いておいたように
イマ タマイレダガッテ ココーコーヤルンダイネ
いま 玉入れとかいって こうこんな風にやるんで
す
47 アノ アイダ ケンダマ ケンダマテーノガ
あの あれだ けん玉 けん玉っていうのですか
アレネ オレラチャッコイドギ ニツィゲツボールッテ
あれね 私たちが小さいときに にちげつボールと
ネ
いってね
48 ニツィゲツボールチューンダワ ノ ナ アレサ
にちげつボールっていうんですわ の ね あれは
49 ソイカラ タケデモッテ ヨンポンツクッテサ ネ ソイ
それから 竹でもって 四本作ってさ ね そ
デ バットコーマグンダイナ
れで ばっとこんな風に撒くんですね
50 ソスバ ホレ アレ アノ ノ マイデ アレ
そうすれば ほら あれ あの ね 撒いて あれ
ヨンポン コーアレシテ コンド コッチノシトワ
四本を こんな風にあれして 今度 こちらの人は
コゴサ タゲ コー サンボンハイレバ コッチ
ここに 竹を こんな風に 三本入れば こちら
ノシトガラサンボントルニイシィ ノ ソーユードギニ
の人から三本取れるし ね そういうときに

アノ アイダ オレ ナンボオモイダシテモ ナガナ
あの あれだ 私は いくら思い出しても なかな
ガダセネーンダヨナ
か思い出せないんだよね
51 イチニーサンシィーッテ コーイワネーデ
一、二、三、四って こんな風には言わないで

イツィゴノショーガラ　ナット　ムクレダケナンテ
越後の塩辛　　納豆　(皮の)剥けた竹の子な
ズィーットノコノ　アノ　アソコンドコノ　ニーガダ
んて　ずうっとこの　　あの　あそこの所の　新潟の
ノネ　アノ　サンジョーダトカ　ズィーットデデクンダヨ
ね　あの　三条だとか　　ずうっと出てくるんです
ネ
よね

52 ウンダ　イツィゴノニーガタ　サンジョトガ　コーヤッテ
そうだ　越後の新潟　　三条とか　　こうやって
ヨ　デ　オイ　ナンジューネンモ　コレ　ホレ　ヤッテ
よ　で　おい　何十年も　　これ　ほら　やって
ネーモンダカラネ
ないもんだからね

53 アレ　タゲッコアソビ　アルンダワ
あれ　竹っこ遊びが　あるんですよ

54 キット　アンタガタワ　ソーユーノ　ミタコトアルベモン
きっと　あなたがたは　そういうの　見たことあるはず
キト
だ　きっと

55 コーイッテ　タゲコーヤッテ　コーヤッテ　コーオモデ
こういって　竹をこうやって　こうやって　こう表なら
ダラ　オモデデタリ　ウラダラ　ウラデダシトガ
表が出たり　　裏なら　裏を出した人が
コンド　マダコーヤリニィークテ　ソイデ　コンド
今度　こうやりにいって　　それで　今度
コレサ　コンド　アノ　タゲ　マダ　コッツィマダジッパリ
これを　今度　あの　竹を　まだ　こっちはまだたくさ
モッテルカラ　　ホイデ　ミセデヤッタンダワ
ん持っているから　それで　見せてやったもんですよ

56 ソイデ　ドッツィガコーショーハイガ　アノ　キマレバ
それで　どちらかのこう勝敗が　　あの　決まれば
イチゴノニーガタ　サンジョー　ムクレダケナンダトカ
越後の新潟　　三条　　(皮の)剥けた竹の子
コレヤッパリ　　アノ　トーマデアルンダワ
だとか　これがやっぱり　あの　十まであるんですよ
コレ
これが

57 ウンダ　ウンダ　カゾエウタミタイナヤツ
そうだ　そうだ　数え歌みたいなやつです

58 ホトンドネー　オソラク　シーセンゴーナッテカラ
ほとんどねえ　おそらく　終戦後になってから
ホトンッド　モー　イマ　アノ　ジジノダイドー
ほとんど　もう　いま　あの　じいさん(本人)の代と
ノ　モ　ゼンゼーチガウカラネ　モー　シーセンゴデ
ね　もう　全然違うからね　　もう　終戦後に
ナンモ　　ホトンドーナグナッタトオナジィーモ
なって何もかも　ほとんどなくなったのと同じようなも
ンダネ　コレ
んだね　これは

59 セーカツニオワレデキテルカラ　ホレ
生活に追われてきていますから　ほら

60 ソーダ　ソーダ
そうだ　そうだ

61 ホレ　オライデナカッタラ　コーヤッテナラベテ　ホレ
ほら　私の家でなかったら　こうやって並べて　ほら
ウーンウンッテ　アンタ　チャーントミデダノカ
うんうんって　　あなた　ちゃんと見ていたんですか
ソレ　タイショーネンカンノ　アントキ
それ　大正年間の　　あのとき

62 デ　コイツワ　アノ　ウスィロノホーサ　オラ　エーゴヨ
で　こいつは　あの　後ろの方に　　私は　英語が
メネエカラ　　オラノ　アノ　エーゴガッコサイッテル
読めないので　私の　あの　英語学校に行っている
ノ　　ザーットヨンダキャ　アノ　メーズィヨンジューサ
のが　ざっと読んだら　　あの　明治四十三年の末
ンネンノスィエッコダッタカ　ウン　ソノトギダベサ
あたりだったか　　うん　その時でしょう

63 ネ　コレモ　ホレ　イマイッタ　モノズキダカラ　ホレ
ね　これも　ほら　いま言った　物好きだから　ほら
ノ　ンデハ　　モーイッカイネ　ガッコーサモイッテキ
ね　でそれで　もう一回ね　　学校へもっていきた
テートオモッテルンダ
いと思っているんだ

64 タダ　ガッコーアダリデ　モノアゾベデ　ネ　イマユー
ただ　学校あたりで　　ものを集めて　ね　いま言う
トーリ　ウンウンタッテ　　ホレ　オレミテエアダ
通りに　うんうんて言ったって　ほら　私みたいに頭
マイーモンダワカルダデ　　ミナアダマノワ
のいい人ならわかるでしょうけれど　みんな頭の悪い
ルィモンバカリイダドモ　チャントカイドゲバ　　チョッ
人たちばかりだから　　ちゃんと書いておけば　ちょ
トサミレバ　セイトサン　コーワガルデショ
っと見れば　生徒さんが　こうわかるでしょ

65 デ　イゾダカ　　アノ　アッ　キューニ　ヘンナハナ
で　いつだったか　あの　あっ　急に　　変な話をし
コイダラ　オゴラーレデシマウナ　ソイデ　アルドキ
たら　　おこられてしまうな　　それで　あるとき
ヤヤ　トーサン　イッカイガッコーサキテー　シッカリ
やや　とうさんが　一回学校へ来て　　しっかり
オシエデケサイテー　ウン　コイカラデモシラベテ
と教えてくださいって　うん　これからでも調べて

ゼンブ　アノ　カイデオギマスカラテ
全部　あの　書いておきますからって
66 ウウーン　マズィセ
ううーん　まずね
67 ダカラ　トーサンガイッツモサッキモ　アンタガダニ
だから　とうさんがいつでもさっきも　あなたたちに
チョットユッテヤケドネ　モノダイズィニセーツユーヨリ
少し言ってやるけどね　ものを大事にしなさいって言
モネ　　コノヨーニシテコドモマゴサ　ネ　モノデ
うよりもね　このようにして子供や孫に　ね　もので
モッテオシーデイガデキャナラナイッテゴドサ
もって教えていかなければならないっていうことです
ネ　ワガルデショ
ね　わかるでしょ

2. 2. 昭和初期の子供たちの遊び

上記の談話には、語り手である玉村栄吾氏（大正15年生まれ、椴法華村在住）の子供時代の遊びが、生き生きと描かれている。遊びの内容として、映画、旗取り、馬乗り、パッチ（めんこ）、剣玉（日月ボール）、竹撒き、竹っこ遊びが語られている。

1）映画（01～07）：村には映画館がないので、業者が映写機とフィルムを持参して各地を回る巡回映画であった。玉村氏所蔵の当時の写真を見ると、大八車に機器を積み幟を掲げている周りに、大勢の子供たちが群がっている様子が写っている。子供たちのある者は宣伝係りに抜擢され、旗を持って村中に映画の宣伝をして回り、その報酬として入場券を受け取っていた。いわば、楽しみながらのアルバイトである。娯楽の少なかった時代にあって、大人の手伝いをしながら楽しみを得、その楽しみをさらに多くの仲間たちと共有するために微笑ましい策略を講じ、それを知ってか知らずか、大人たちは黙認している。まさしく「ノドカ」な「フーシュー」である。

2）旗取り（08～20）：戸外での遊びの代表に旗取りがある。これは部落対抗（たとえば、元村対富浦）ではなく、一部落内での団体戦であったようである（11）。旗取りは準備段階からの協力（グランド作り（12）、（15））、駆け引き（使いの者を一人ずつ立てての交渉（16））、交渉決裂時の喧嘩（16）、スリリングな本番（17）、終了後の楽しみ（木の実取り（18））などから構成されている。ここには遊びの必須要素がすべて集約されている。プロトタイプの遊びである。

3）馬乗り（21～27）：屋内での遊びで（神社、体操場（21）、（25））、雨の日や学校の休み時間に行われた。先に言及した二つの遊びが専ら男子だけのものであったのに較べて、女子も行っていた（24）、（25）。

4）剣玉（46～48）：これを「ニツィゲツボール」と呼んでいた。丹治氏（北海道開拓記念館主任学芸員、渡島地方の民具の研究に従事）は「日月ボール」の字を当てている。剣玉が三つの皿、十字形の柄、木製の球という現在の形になったのは、大正時代からであるそうだ（広辞苑第四版、岩波書店）。「日月」の名は、おそらく、その形状から由来しているのだろう。

5）竹撒き（49～50）：四本の竹の棒を握り、ぱっと手を離して、結果に応じてやり取りをする遊びであるが、詳細はわからない。玉村氏自身も思い出せないと述べている（50）。

6）竹っこ遊び（53～55）：これも竹を使った遊びで、表が出るか裏が出るかで競うようだが、詳細は不明である。

この他に、めんこ（パッチ）遊びがある。以上で挙げた遊びは、男子の遊びが中心となっている。同年代の女性の聞き取りも済んでいるので、稿を改めて発表し、本稿の内容を補いたいと考えている。また、5）と6）の竹遊びについても、調査を続けていきたい。

2. 3. 伝承

怪異談、伝説、俗謡のような伝承については、談話の中に二箇所言及がある。一つは、「アカシャク」についてで、もう一つは、数え歌についてである。

1）「アカシャク」（33～41）：玉村氏は船大工をされていた。見習い時代は道南の砂原町で過ごし、その折に、「アカシャク」の言い伝えを聞き、また自身それをこしらえた経験をもっている。「アカシャク」は船に備えてあるひしゃくで、船内に入ってきた水を掻き出す道具である。海には超自然的な怪物がいて、船を沈めようと、ひしゃくを貸すように求めるのである。底の付いたひしゃくを渡せば、船はたちまち水中に没してしまうであろうが、底のないひしゃくであれば、その心配はない。しかも、表面的には海の怪物の命令に従っているのだから、怒りに触れることもない。一石二鳥の知恵である。この種の伝承は、海の仕事に携わる人々の間で広く言い伝えられていて、椴法華特有のものではないだろう。ただし、昭和10年代にはまだ実際に作成していたというのは、興味深い（41）。この伝承も動力船の導入という近代化の波にもまれ、消えていくことになる。

2）数え歌（51～52、56～57）：一から十まである歌詞のうち、部分的に記憶しているものを採録した。「越後」は方言では「イ」と「エ」の間の舌の高さで発音されるので、「エチゴ」よりは「イチゴ」に近い音に聞こえる。「イチゴ」、「ニイガタ」、「サンジョウ」と「イチ、ニイ、サン」の音がそろっているという偶発的な理由で新潟県にまつわる名称がそろっているのか、この地に着目する必然的な理由があるのかについては、現段階ではわからない。歌詞全部を記録するとともに、新潟県とのつながりを調査する必要がある。

3. 中舌母音について

椴法華方言には2種類の中舌母音が用いられている。例えば「海」［ɯ̈mɨi］、ウニ［ɯ̈nɨi］などがある。この二つの中舌母音については、共通語の[i][ɯ]と比べて口腔の中側で発音されると考えられており、時には混同が起こるとされている[(1)(2)(3)]。

椴法華方言の中舌母音の[ɨ]は音素/i/の異音の１つ考えられ、子音と結合して音節を形成する場合に現れる。語頭や母音に後続する場合には[ę]となる。

(1) エロ（色）エス（椅子）エギ（駅、息）
エダ（枝、板）
(2) コエビト（恋人）ハヤグコエデコエ
（早く漕いで来い）
(3) kimɨ（君） nɨsi（西） kɨta（北）
mɨnamɨ（南） nɨsɨn（鰊）

(1)の例は語頭で子音に先行されない場合を示している。このような場合、エギ（駅、息）エダ（枝、板）のような例は母音の音質上は対立を失ってしまう。しかしアクセントの区別があるので意味の混同のおそれはない[(2)(3)]。(2)の例は、母音に後続する場合で/koi/という連鎖が[koę]として具現している。これらの(1)と(2)から

(4) 音節頭の/i/は[ę]となる

と一般化できる。[(3)]

3.1 音響分析

以下では(4)の妥当性を音響分析によって考察してみることにする。

3.2 方法

サンプルは2節でカナによる記述をしたものから、音節頭に生じている/i/と、/e/を10例ずつ選択した。

録音はSONY社製DATレコーダTCD-D100、同社製エレクトレットコンデンサマイクロフォンECM-MS907を用い、サンプリング周波数44.1kHzで行った。実施場所は椴法華村の玉村氏の自宅である。録音は、玉村氏に自由に話をしてもらい、その自然談話を録音した。これは音声の自然さを重視したからである。

この音声をSyntrillium社製Cool Edit 2000を用いてサンプリング周波数8000Hzにダウンサンプリングし、それをＮＴＴアドバンテストテクノロジ社製SPWIN Pro Version 2.0bを用いてスペクトル解析およびＬＰＣ解析を行い、第１フォルマント(F1)と第２フォルマントの値を求めた。

3.3 結果

以下に各母音のＦ１とＦ２の値を示す。

表１：音節頭の/i/のF1とF2の値

	F1	F2
i_i_ttari	350	2127
i_i_ma	365	2223
i_soide	340	1604
i_zu_i_bun	341	1902
i_i_shi	415	2356
i_ish_i_	435	1662
i_ii13	375	1941
i_danta_i_	502	1788
i_ima	341	2247
i_iwate	314	2354

表２：/e/のF1とF2の値

	F1	F2
e_k_e_n	404	2435
e_nim_ee_	365	2094
e_ee_ga	330	2306
e_tatoeba	428	1568
e_kurundesu	310	2325
e_kokosane	391	2136
e_motte	341	1930
e_dayone	317	2338
e_kenka	321	2024
e_hore	452	1886

表 3:/i/と/e/の F1 および F2 の平均値

	F1	F2
音節頭の/i/	377	2020
/e/	365	2104

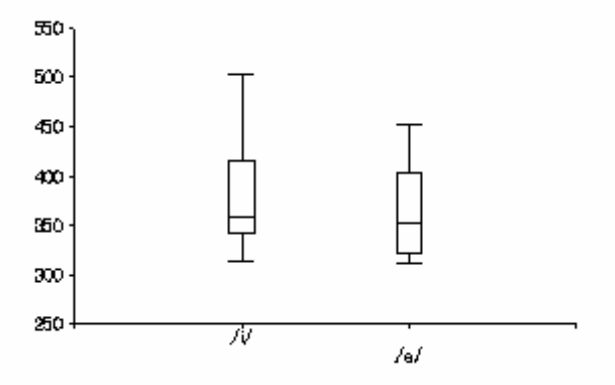


図１：/i/と/e/の F1

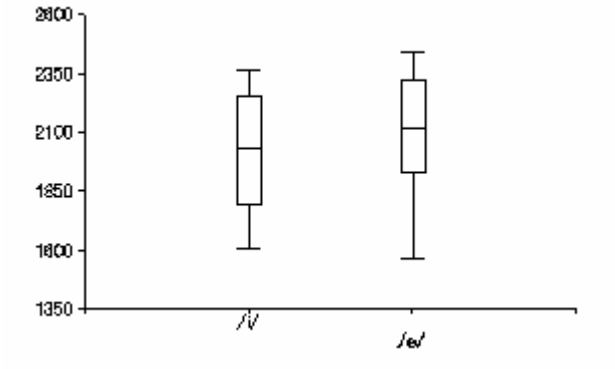


図２：/i/と/e/の F2

3.4 考察

ここでは平均値をもとに音節頭の/i/と/e/の音質の類似性について考察する。すでに見たように先行研究において、/i/が語頭に生じる場合および母音に後続する場合に/e/と同じように発音されると指摘されている。実際表 3 の F1 と F2 の平均値を比べるとほとんど差が無いことがわかる。平均値の差の検定を行ってみたところ、F１(p=0.3134)、F2(p=0.2497)ともに有意差が認められなかった。

図１、２から、F1 に関しては/i/のほうが数値が大きく、開口度が大きいことが分る。F2 に関しては、逆に/e/のほうが数値が大きく、舌位置が前寄りであることを示している。この差は、統計的優位さは認められないものの、/i/の中舌性に起因すると考えられる。音声学的に見れば、音節頭の/i/にも中舌母音のらしさが窺える。一方/e/は、F1 と F2 の数値を見ると、[i]に非常に近いと言える。

これらのことを考える際に考慮に入れなければならないのは、椴法華方言において、現在扱っている環境以外では/i/が中舌母音の[ɨ]として具現することである。島田(2003)[5]において行われた音響分析(N=10)の結果を示すと表４のようになる。

表4:音節頭以外の/i/の F1 および F2 の平均値

	F1	F2
音節頭以外の/i/	322	1624

表 3、4 の F2 に着目すると舌位置の違いがよく分る。音節頭の/i/と/e/のほうが音節頭以外の/i/よりずっと前寄りであり、[i]に近い。F1の値はどれも大きな違いがないが、若干音節頭以外の/i/の値が小さいので開口度が小さいことがわかる。以上のことをまとめると(5)のようになる。

(5) /e/および音節頭の/i/は[ɐ̟]もしくは[i]となる。

このことは(4)の一般化の一部が正しいことを示している。少なくとも音節頭とそれ以外の環境では/i/の現れ方が異なっており、音節頭では中舌母音とならないのは確実である。

問題となるのは音節頭の/i/が、先行研究の主張するように[ɐ̟]なのかどうかである。少なくとも本稿で行った音響分析によると[i]として記述したほうがよいと思われるものが多かった。もともと[i]と[ɨ]に対立がないので、条件異音として並存可能である。可能性としては/e/も音節頭で[i]として具現するということも考えられる。

これからの課題としては、先行研究で記述されている[ɐ̟]が[i]へと変化したのか、それとも[i]が[ɨ]と違う点を捉えはしたものの、母語話者の直感として/i/=[ɨ]ということから[i]を[ɐ̟]として捕らえたのか、明らかにすることがある。この点に関しては、椴法華方言の音素体系とその具現の仕方をさらに考察して決定すべきであると考えられる。

4. まとめと今後の展望

本稿では椴法華村において行われた聞き取り調査の文字データ化とそのデータから得られた風習についての考察を行った。文字データは研究の資料として重要なものであると同時に、椴法華村の記録という意味もあ

り、北海道南部地方を地盤とする本学の地元への貢献の一助となると考えている。

今後の課題は二つ考えられる。一つ目は今回紙幅の制約で行えなかった詳細な音声データの解析である。トピックとしては2種類の中舌母音[4]や母音の無声化、子音の有声化などがある[1][2][3]。もう一つは今回新たに得られた数え歌などの由来を解明するために、関係する越後地方の調査が必要である。

謝辞

本研究に当たり玉村栄吾氏には調査協力者として長時間にわたるインタビューを快諾して下さったのを始めとして限りない協力を賜りました。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

また調査協力者の選定、過去の資料の閲覧等に際しては椵法華村教育委員会の方々にお世話になりました。ここに篤く御礼申し上げます。

本研究は平成12年度室蘭工業大学CRDセンタープレ共同研究「道南渡島東岸部方言の緊急調査」の助成を受けている。

注

（1） 島田武、橋本邦彦、寺田昭夫、塩野亨著「椵法華（とどほっけ）における言語と風習-失われゆく伝統」室蘭工業大学紀要第51号 pp173-182, (2001).

（2） 談話記録を書くにあたって、北海道開拓記念館の丹治輝一氏から貴重なご指摘をいただきました。感謝申し上げます。

(3) このことから/koi/という連鎖が1音節ではなく、/ko/+/i/と分割されることが推測できる。

文献

(1) 五十嵐三郎，北海道方言の概説，講座方言学4－北海道東北地方の方言－，p1-62，国書刊行会，(1982).

(2) 石垣福雄，日本語と北海道方言，北海道新聞社，札幌（1977）.

(3) 石垣福雄，北海道沿岸部の方言，講座方言学4－北海道東北地方の方言－，p63-92，国書刊行会，(1982).

(4) 今石元久，日本語音声の実験的研究，和泉書院，(1997).

(5) 島田 武，椵法華方言の中舌母音について，認知科学研究第2号，p59-74，室蘭認知科学研究会，(2003).

(6) 沢哲夫ほっかいどう語－その発生と変遷－，（五十嵐三郎，長谷川清喜，佐藤誠，石垣福雄，渡辺茂監修），北海道新聞社，札幌（1970）.

(7) 小野米一・奥田統己，北海道のことば，（北の生活文庫第８巻）北海道，札幌，（1999）.

(8) 平山輝男，小野米一，石垣福雄，道場優，北海道のことば』明治書院，東京，（1997）.

Appendix

以下に本文でカナ表記した談話を国際音声記号で表記したものを挙げる。ほぼ簡易表記となっているが、中舌化と有声化はそれぞれ補助記号を付加してある。

01 taʈoeba hoɾe mɯ̈kaɕi koqosane ano eːga
kɯ̈ɾɯ̈ndesɯ̈jo eːgane
02 soieba haʈa modʑiʔtene sʲitoɾiqa ɸɯ̈ʲtaɾisʲite haʈa
moʈʂɯ̈ ɯaqenansa
03 no soide haʈaɯo motʔte mɯ̈ɾadʑɯ̈ː koː
aɾɯ̈kɯ̈ndajone mɯ̈ɾadʑɯ̈ː aɾɯ̈kɯ̈ɯaqeda
04 de soiʈoqiⁿi hoɾe keẽ n̈imeːdaː n̈imeː
samʔmeː daː samʔmeː keɾɯ̈ɯaqenanose
05 daqedo samai moɾataɾa sanʔn̈iɴjoɾi
haiɾaneːbesejo
06 soi hoikoso naqamagaiʈe hoɾe no ɕoᵐbeɴ
ɕiⁿïiqɯ̈inta ɸɯ̈ɾikoiʈe hoɾe no ɯ̈ɾado aqeʈeha
haitʔte mata mʲiʈeʈemone beʈʂɯ̈ⁿi maʈa anoː
oqoɾimo sʲineːndajono
07 tada soːjɯ̈ːno nantɕɯ̈ⁿqa nodoqatɕɯ̈ndaqane
soːjɯ̈ː japʔpaɾi ɸɯ̈ːɕɯ̈ːɯa atʔtane
08 kodomonoqoɾono asobiʔte jɯ̈ebane anoː
japʔpaɾi jamasaʲitʔte haʈatoɾidano
09 haʈatoɾi haʈatʔte ɕinomaɾɯ̈no haʈatoqa anoː aida
10 ⁿda soⁿde kotʔtɕa koɾeneːjoːn̈iɕʲite maː taʈoeba
oɾeʈatɕino baːideareba tosanʈatɕino baːidearebano
onadʑisaqidemo koqo moʈomɯ̈ɾatʔteʈoqo daɕi
korekaɾa n̈ikʲiɾokɯ̈ɾai ʲitʔtaʈoqon̈i tomʲijɯ̈ɾatʔteʈoqo
aɾɯ̈ⁿdɯ̈sɯ̈jo
11 de tomʲijɯ̈ɾaaʈaɾimo ɸɯ̈ʲtaten̈i ɯaqaɾeʲte
aɾɯ̈ɯaqedabesʲi
12 ɴ madʑine soʲide mada tɕondoʲiː nohaɾa aɾɯ̈nda
mʲinʔnasʲite hoɾe kamamotʔtetʔte ɕiratsʲio tsɯ̈kɯ̈tʔtes
a
ɕiɾa ɕiɾa no waqaɾɯ̈deɕo
13 maː soʲitokoɾon̈iɯa tɕondoʲiː ʲisi aɾɯ̈ndabesʲi soʲide
tɕanto haʈa tateteoqɯ̈ɯaqesa
14 de kotʔtsʲino dantaʲiɯa kotʔtsʲino dantaʲidemotʔteː
moː soːjɯ̈ːtoqode mata ɯ̈ndoːkaʲi jaɾɯ̈ʲintahaː

15 mïnˀna atsɯ̈matˀte are kosaɯ̈nda gɯ̈rando
tsɯ̈kɯ̈ɾɯ̈ ɯaka̠jabesi
16 soide hore kotˀtsito sotˀtsino hoːto no tsɯ̈kai
sitoɾi ïtaɾi kitaɾi site no de konoː hore jokɯ̈
kenka kokɯ̈ndaⁿdajoː
17 soko toːseba sotˀtsino hoːno hata toɾaɾeɾɯ̈besi mata
sotˀtsi kotˀtsi toːseba sotˀtsino hata toɾaɾeɾɯ̈basi no
18 soide hore jamaɲi ïte haa̠toɾi site de asonde
tendeɲi mïo totˀte no soide maː jesa kaeɾɯ̈ maː
soːjɯ̈ː asobidane
19 ija betsɯ̈ɲi neːno
20 maː osoɾaka̠ɯ̈ oɾaa̠tatsiɯa maː sona moⁿdane
21 maː ame ɸɯ̈ba dzïndz̥asa haïteno manoɾi jaɾɯ̈
kɯ̈reːna monde
22 hotoɴʔd̥o imana̠toka̠odeɯa
23 madzi asobiːteba patˀtsika omïyasa itˀteː
ɯ̈manoɾidanoː
24 namˀmo onagosaː noː kaːsana̠tsimo gakɯ̈seːdemo
kekˀkoː jatˀtatˀte kiːta̠teːane:
25 taisoːbade jasɯ̈mïdzïkanˀnaɾebane
26 tsɯ̈nagatˀtetˀte ɯ̈sïɾokaɾa kokˀko
haneta̠eika̠ɯ̈ɯaka̠edabesi
27 asɯ̈biːtena ɯ̈manoɾɯ̈ka̠ kɯ̈ɾena mondana
ɯ̈manoɾika̠ patˀtsika̠
28 soːjɯ̈ːno neːnaː kiːta̠ka̠oto neːnaː
29 ɯ̈tɕ̟ino mɯ̈ka̠oganeː ïɯatekeno toːnokaɾa
kʲ̥teɾɯ̈ndaɯa
30 madzine soide oremo hore ima jɯ̈ːta koːjɯ̈ː
ohanasisɯ̈kidamondakaɾa neː anoː janagida
kɯ̈ɲiono toːnomonogaa̠taɾi jonde ïkˀkai ikɯ̈seː
ikɯ̈seː to omotˀta dakˀkjaː neː oɾano mɯ̈sɯ̈meta̠o
toːnono mɯ̈ka̠osanto ïɕˀɕoɲi natˀtsimatˀtandamono
maː soɾega itˀtesa dzïːbɯ̈ɴ imano
kapˀpamonogataɾi datoka ïɾoïɾona soːjɯ̈ː
monogaa̠taɾi aɾɯ̈kedo todohokˀkeɲiɯa soːjɯ̈ː
monogaa̠taɾiɯa neːnaː
31 dzasʲ̥kiɯaɾasino koto noː dzasʲ̥kiɯaɾasiɲi
natˀtsimatɯ̈ka̠edo kiːtaka̠oto neːnaː
32 ɯ̈ɴ soɾeɯa aɾɯ̈aɾɯ̈
33 tɕoto kaːsanto hanasi sʲ̥ite fɯ̈tondzite koide ɕinto
ataete kɯ̈ɾebana anoː aida anoː ima jɯ̈ːtoːɾi
akaɕaka̠ɯ̈ino anoː akaɕaka̠ɯ̈ino fɯ̈tatsɯ̈
motˀteika̠ɯ̈ndatoseː
34 akakakɯ̈ ano ɕakɯ̈ ano kakɯ̈jatsɯ̈ne
35 soide kondo no aeda hore jamagisino dzïːkaɾa
kiːta̠ndaina:
36 oidaː hore ano saɯaratˀte toka̠ode fɯ̈nadeka̠ɯ̈
mïnaɾaiɲïˀtˀtetaⁿdaɯa
37 hoide sokode hoɾe ɯ̈tɕ̟side fɯ̈ne tsɯ̈kɯ̈tˀta
ɯaka̠enande:
38 demo todohokˀkemade kaɾekoɾe goɾokˀkiɾo
aɾɯ̈mondakaɾa ne onadzi akaɕakɯ̈ demone
anoː fɯ̈tʲ̥atsɯ̈ moa̠teba iːndate ɕiʲ̥totsɯ̈ɯa hoɾe soka̠o
nɯ̈iite ɕiʲ̥totsɯ̈ɯa sonoː aka̠aɕakɯ̈ motˀte ɴ
39 soide hoɾe aka̠aɕakɯ̈ kasetˀtjɯ̈ːtaɾane soko
nɯ̈itajatsɯ̈ kasʲ̥itejareba koⁿda mïdzɯ̈ hainendate
oɾeta̠tsi saɯaraɲi ite hoɾe kosaeta̠e kosaeta̠a oboe
aɾɯ̈moɴ sʲ̥itatˀte
40 aka̠a kaka̠ɯ̈ino fɯ̈tʲ̥sɯ̈ː aka̠a kaka̠ɯ̈iteːba ano aida ko koː
natˀte tsɯ̈tˀtsɯ̈ite koko kaka̠ɯ̈ndakedo ne sʲ̥ite
ketsɯ̈noho:ita̠ ɯ̈ta̠nende jatˀta moⁿdaː
41 soːjɯ̈ː areɯa aɾɯ̈kedo maː oɾaa̠tatʂ̟i tɕokɯ̈sʲ̥etsɯ̈neː
moː oɾaa̠tatʂ̟ino daiɯa ɕoːɯa dz̥ɯ̈ː monooboe
tsɯ̈ita̠anoɯa dz̥ɯ̈ːnenkaɾane dz̥ɯ̈ːɲisanˀnen
natˀteikɯ̈kaɾataisita: ne doːɾjoka̠ɯ̈seŋgane dondon
hoɾe koː detekiteɾɯ̈kaɾa maː imantoka̠odeɯa
soːjɯ̈ːno kiːtakoa̠oneːna
42 oɾe koneⁿdamona ɯ̈tsino kaːsanˀɲi itˀta
mondakedomo naŋka̠ mɯ̈ka̠asino okˀkaneː
hanasidatokane naka̠eba jamakaɾa moŋˀko
kɯ̈ɾɯ̈tokate so soitsa tsɯ̈itejɯ̈kɯ̈ino neːkate
kaⁿdzide hanasʲ̥itejandaɯa
43 ɯakaɾɯ̈ ɯakaɾɯ̈ oːoː
44 ima tɕotˀto koː kika̠aretemonaː
45 maː asobidabane anoˀïɾoïɾo atˀtane
46 madzi oremo maʔ kokosa kaita̠akedone ima
tamaiɾedakatˀte ko koːkoː jaɾɯ̈ndaine
47 ano aida kendama kendamateːnoga arene
oɾa tɕakˀkoi toka̠i ɲitsigetsɯ̈boːɾɯ̈tˀte ne
48 ɲitsigetsɯ̈boːɾɯ̈tɕɯ̈ːtandaɯa no na aresa
49 soikaɾa taka̠edemotˀte jompoɴ tsɯ̈kɯ̈tˀtesa ne soide
batˀto koː maka̠ɯ̈ndaina
50 sosɯ̈ba hoɾe ano ano no maiɲe aɾe jompoɴ koː aɾe
site kondo kotˀtsino ɕitoɯa koka̠osa taka̠e koː
sambɔɴ haireba kotˀtsino ɕitokaɾa sambɔɴ
toɾɯ̈ɲiːɕi no soːjɯ̈ː toka̠iɲi ano aida oɾe nambo
omoidasiɲemo nakanaka̠a daseneːndajena
51 ïtsi ɲiː saɴ siːtˀte koː ïɯaneːde ïtsigono ɕoːkaɾa
natˀto mɯ̈ka̠ɯ̈ɾeta̠aka̠e nante dzïːtˀto kono ano
asokonta̠oka̠ono ɲiːgatano ne ano sanjoː datoka̠a
dzïːtˀto deta̠ekɯ̈ndajone
52 ⁿda ïtsigono ɲiːgata sanjotoka koːjatːte jo de oi
nandz̥ɯ̈ːnemo koɾe hoɾe jatˀtaneːmondaka̠aɾane
53 aɾe taka̠eno koː asobi aɾɯ̈ndaɯa

54 kitˀto antagataɯa soːjɯ̈ːno mïtaɻotoarɯ̈beomoɯ̈ kɻ̥to
55 koːitˀte taɻe koːjatˀte koː omoʈedara omoʈe deʈaɾi ɯ̈ɾadara ɯ̈ɾa deʈa ɕi̥toŋa kondo maʈa koː jaɾiniːkɯ̈te soide kondo koresa kondo ano taɻe maʈa kotˀtsi mada dʑipˀpaɾi motˀterɯ̈kara hoide mïsetejatˀtandaɯa
56 soide dotˀtsika koː ɕoːhaïŋa ano kimareba ïtsigono niːgaʈa sanjoː mɯ̈kɯ̈redake nanda toka kore japˀpaɾi ano toːmade arɯ̈ndaɯa kore
57 ⁿda ⁿda kadzoeɯ̈tamïtaina jatsɯ̈
58 hotondoneː osoraɻɯ̈ ɕɯ̈ːsengoːnatˀtekara hotˀtondo moː ïma ano dʑidʑino daiʈo: no mo dzeⁿdzẽ tsigaɯ̈karane moː ɕɯ̈ːseⁿgode namˀmo hotonɲ̥oː nakɯ̈natˀtato onadʑiː moⁿdane kore
59 seːkatsɯ̈ni oɯareʈekɻ̥terɯ̈ kara hore
60 soːda soːda
61 hore ora edenakatˀtara koːjatˀte narabete hore ɯ̈ːɴ ɯ̈ɴtˀte anta tɕaːnto mïtetanoka sore taiɕoːneŋkanˀno antoki
62 de koitsɯ̈ɯa ano ɯ̈sironohoːsa ora eːgo jomeneːkara orano ao eːgogakˀkosa ïtˀterɯ̈no dzaːtˀto jondakˀkja ano meːdʑi jondʑɯ̈ːsanˀnenˀno sɯ̈ekˀkodatˀtaɻa mː sono toɻ̥idabesa
63 ne koremo hore ïmaitˀta monodzɯ̈kidakara hore no ⁿdeɯa moː ïkˀkaine gakˀkoːsamo itˀtɐ̨kiteːto omotˀterɯ̈nda
64 tada gakˀkoː ataɾide mono atsɯ̈beʈe ne ïma jɯ̈ːtoːɾi ɴːɴː tatˀte hore oremïte atama ïːmoⁿda ɯakarɯ̈idade mïna atamano ɯarɯ̈i mombakaɾi ïtadomo tɕanto kaitoɻ̥eba tɕotˀtosa mïreba seitosaɴ koː ɯaɻ̥arɯ̈deɕo
65 de ïtsɯ̈daka ano aʔ kjɯ̈ːni henˀna hanasi koitara okoraː ɾete simaɯ̈na soide arɯ̈toki jaja toːsaɴ ïkˀkaïgakˀkoːsa kɻ̥iteː sikˀkaɾi osïetekesaiteː mː koekarademo sirabeʈe dzeᵐbɯ̈ ano kaiʈeokimasɯ̈karate
66 ɴː madʑise
67 daɻ̥ara toːsaᵑga itˀtsɯ̈mo sakˀkimo antagataɲi jɯ̈tˀte jakˀkedo mono daidʑiɲi seːtˀtsɯ̈ːjoɾimo ne konojoːnisɻ̥ite kodomo magosa ne monodemotˀte osite ïkanekjanaranaitˀtekotosa ne ɯakarɯ̈deɕo

以下に表１と表２で用いた単語のリストを挙げる。実際に分析した母音は表中のアンダーバーで挟まれたものである。

表１

i_i_ttari	言ったり
i_i_ma	今
i_so_i_de	そいで（＝それで）
i_zu_i_bun	ずいぶん
i_i_shi	石
i_ish_i_	石
i_ii_13	良い（いい）
i_danta_i_	団体
i_i_ma	今
i_i_wate	岩手

（表中に「今」と「石」が二度出ているが別の発話である。）

表２

	F1
e_k_e_n	券
e_nim_ee_	二枚（にめえ）
e_ee_ga	映画
e_tatoeba	たとえば
e_kurundesu	来るんです
e_kokosane	ここさね（＝ここへね）
e_motte	持って
e_dayone	だよね
e_kenka	喧嘩
e_hore	ほれ